

## 韓国のデジタルアーカイブとその利用

田中 福太郎

ただいまご紹介にあずかりました田中福太郎と申します。国立国会図書館関西館から参りました。今回は「韓国のデジタルアーカイブとその利用」というタイトルで、お話ししたいと思います。

まず、なぜ国立国会図書館の職員が、韓国のデジタルアーカイブのことを話すのかについてお話ししようと思います。私自身は、先ほどの紹介にありましたように、大学で朝鮮語学を研究していました。二〇〇三年に国立国会図書館に入館しました。皆さんは、国立国会図書館というとおそらく国会議事堂の隣にある東京本館を思い出されるのではないかと思います。実は二〇〇二年に京都府南部の精華町というところに、関西館という新しい図書館ができ

ました。国立国会図書館は、納本制度により、日本で出版された本を集めて、永久に保存していくという図書館ですが、資料の所蔵数は今四一〇〇万点を超え、書庫がもうほとんどいっぱいです。そこで、今から一四年前に関西館が開館し、こちらは六〇〇万冊ほど入れられる書庫があります。京都といいますが、ほとんど奈良県の県境に近いところで、関西化学術研究都市という所に広大な土地を確保しまして、関西館を設置しました。その関西館もあと数年で書庫がまたいっぱいになることが見込まれていますので、書庫を増築している途中です。

この関西館では、欧文雑誌、アジア関係資料、科学技術関係資料、規格、博士論文、今回ノーベル賞を取られた大

隅先生の論文もありますけれども、そのような資料を中心に所蔵しています。

その関西館にあるアジア情報課で、私が今何をしているかといいますと、アジア情報課が運営するアジア情報室は、日本を除くアジア地域を担当する専門資料室といえますが、その中で朝鮮語資料の選書、目録作成（データベースに登録して検索できるようにする）、アジア情報室での資料提供、レファレンス（利用者の質問に答える）、国会向けサービス（国会議員やその関係者の方などからの問い合わせに答える）などを行っています。ほかにはホームページ「アジア諸国の情報を調べる」(<http://navi.ndl.go.jp/asia/index.php>)の運営をしています。関西館に来ていただけの方のためにも、ホームページを通じて、アジアのことを調べるにあたって参照すべき資料や情報などを発信しています。

本日は「韓国のデジタルアーカイブとその利用」というテーマですが、まずは私の個人的な体験からお話したいと思います。大学院生時代に、修士論文を書く参考となる論文を集めるために、韓国の国会図書館というところに行きました。その当時論文を集めるといって、自分の読まなければならぬ論文を冊子体の目録やデータベースで調べ、書庫から本をとってきてもらい、必要な部分をコピーしなければいけないと思っていました。確か二〇〇二年

だったと思いますが、既に韓国ではオンライン目録上に論文のファイルが載っておりまして、そのパソコンの横にあるプリンターに、複写料金支払いのためのプリペイドカードを購入しセットすると、そのプリンターから論文が打ち出されてくるというようになっていました。後ほどお話ししますが、ちょうど韓国では、国を挙げて情報化政策の一環でデジタル化が進んでいた頃でしたので、今振り返ると、デジタルアーカイブをまさに構築しているときに韓国の図書館を訪れていたのだな、ということを感じた次第です。

ここから本題に入らせていただきます。「はじめに」ですけれども、韓国では一九九七年にIMF危機というのがあり、困難な経済状況にありました。そこで情報化政策の一環で、デジタルアーカイブを構築するという事業が大々的に進められました。図書館の資料に関していうと、古書から近現代の図書、雑誌や学術雑誌の記事単位のデジタル化、それから学位論文についても、日本では現在、博士論文は電子ファイルを送付していただくことになっていますが、韓国では修士に当たる碩士論文と、博士論文がデジタル化されています。また、本だけではなく、古文書や古地図、文化財、史跡・遺物・仏像の写真や、新聞記事もデジタル化が進んでいます。これらのデジタルアーカイブについては、インターネットを通じて無料で利用できるものが多いです。朝鮮の歴史研究だけではなく、韓国で今どうい

うことが起こっているかという現代事情を調査することにおいて、大いに活用できるものです。

ではこれから、例をいくつかお見せしながらお話していきます。まず、国立中央図書館です。一九四五年に設立された国立の図書館です。韓国に行かれたことがある方はひよっとしたらご存じかもしれませんが、ソウルの中心部、中区にロッテ百貨店本店がありまして、そこにあった図書館です。今は瑞草区という、南のほうに移っています。文化体育観光部という行政の省庁に所属している図書館で、日本の国立国会図書館と同じように納本制度により、韓国内の出版物を網羅的に集めて保存している図書館です。蔵書数は昨年一〇〇万点を超えたところです。

一九四五年設立ですが、これは日本の終戦により国立の図書館になったというので、それまでは朝鮮総督府図書館でした。その蔵書を引き継いでいますので、一九四五年以前に発行された日本語資料の所蔵も多い図書館です。

デジタル化は、学術価値があると認められた資料を中心に進めているようです。四五万冊がデジタル化され、著作権の処理が済んでいるものは無料で見られます。内容としては、貴重書や単行本、雑誌、逐次刊行物、古地図や朝鮮総督府の資料であり、貴重書は九割近く、朝鮮総督府資料も八割近くがデジタルで見られるようになっていきます。

では、実際にどんな本が見られるのかというのを少し見

てみたいと思います。アジア情報室のホームページにあるリンク集 (AsiaLinks) からたどっていきたいと思います。これがトップページ (<http://www.nl.go.kr/nl/index.jsp>) です。きょうはせっかく『小倉進平関係文書目録』を発行された学習院大学にきていますので、戦前の朝鮮語学研究者の小倉進平氏のことを検索欄に入力して調べてみたいと思います。日本語の漢字で入れてみました。そうすると四四件ヒットします。一番上が『言語の構築』という日本語の本です。その下は学位論文です。『小倉進平と國語音韻論』という本もヒットしています。その下の「小倉進平に関する研究」というのは学術雑誌の論文です。一番右側のタブに「所蔵原文」という欄がありますが、これはデジタルデータにリンクが張つてあるというものだけを検索できるものです。

「原文を見る」というボタンがついていまして、クリックすると、これは『朝鮮総督府官報』です。冊子体の複製版もあり、こちらの東洋文化研究所さんでもお持ちだと思えますが、こうしてすぐにデジタルデータで官報が見られます。

これは大正一五年四月二八日の官報ですが、小倉進平氏は京城帝国大学の教授をしていて、大正一五年四月二〇日、京城帝国大学附属図書館長に補す、職務俸六〇〇円を下賜するというようなことが書いてあります。こうやって日本

にいながらにして、インターネット上で調べられます。韓国の図書館のサイトで日本語の資料を調べるといいうのは、ピンとこないところもあるかもしれませんが、デジタル化を韓国のほうでどんどん進めており、私たちも利用することができそうです。

参考までに、日本の国立公文書館でもデジタルアーカイブ (<https://www.digital.archives.go.jp/>) を作っています、さきほど六〇〇円と書いてありましたが、「京城帝国大学高等官俸給令」というものがあり、これによると、「教授又ハ助教授ニシテ学生監又ハ図書館長ニ補セラレタル者ニハ職務俸給年額六〇〇円以内ヲ給スルコトヲ得」と書いてあります。このように、韓国のデータと日本で公開されているものを見比べながらネットで調べていくというようなことができるようになっていきます。

もう一つ例をご紹介しますと思います。朝鮮総督府の資料が多くデジタル化されていますが、その中に『朝鮮司法保護』という資料があります。朝鮮総督府に朝鮮司法保護協会というものができたときにこの雑誌を発行していました。日本では京都大学法学部図書室に二巻がありますが、韓国の国立中央図書館では一巻から所蔵しています。

これも見ていただくと、ビューワーが立ち上がったって本文が見られるようになっていきます。これは創刊号です。この時代の資料は、意外と日本で所蔵していないものも多いの

で、韓国のデータベースでこうやって見ていただいたら、たちどころに調べられるようになっていきます。また、このデータは印刷できるようになっています。韓国の著作権法ではデジタル化した資料を他の図書館で見ようとするとときに、補償金が一ページ当たり三〜六ウォン程度かかったりするのですけれども、この本に関しては、無料でプリントアウトできるようになっています。

国立中央図書館は、韓国の本を調べるときにはもちろん、日本語の本を見てみたいというようなときにでも使ってみていただくといいことかと思えます。

次は国会図書館 (<http://www.nanet.go.kr/>) です。日本で国立の図書館というと国立国会図書館一つだけですが、韓国では国立中央図書館と国会に属している図書館が別々に存在しています。この国会図書館は一九五二年に設立された国会に属している図書館です。国会議員に対するサービスのほか、一般の方でも利用できる図書館です。蔵書の数は五八三万点となっています。

最初に一九九七年にIMF危機があつたとお話ししましたが、一九九八年から情報化勤労事業というものを国が挙げて行うことになりました。当時、若者の失業者が大量に出ましたので、大学は出たけれども就職先がないような、そういう学生たちをデジタル化の事業に従事させることにして、若年者の雇用対策の一環としてデジタル化事業を行

いました。現在、古書、戦前の雑誌、学位論文、学術論文、政府刊行物（白書類）などを四〇〇万件、一億九〇〇万ページがデジタル化されています。こちらも、著作権処理が済んでいるものは、インターネット上で無料で見ていただくことができます。

国会図書館でデジタル化されているのは、図書、修士論文や博士論文、公共政策資料、国会会議録といったものです。ここでどんな本が見られるのかを見てみたいと思います。

例えば韓国の情報化政策について調べるとして、情報化政策と入れてみます。ハングルでもちろん入れていただいてもいいのですけれども、日本語で入れていただいてもある程度ヒットします。今回の場合は四五四件の本や雑誌記事などがヒットします。インターネット資料というのがありますが、これを押していただくとインターネットで見られるものだけが表示されます。例として、これは韓国情報化振興院というところが出している雑誌の記事です。このように政府系の刊行物についてはインターネット上で見られるようになっていきます。

このように現代の本も調べられますし、戦前の古書も調べられます。ここで一九二〇年代の文学雑誌『朝鮮文壇』というのを見てみたいと思います。復刻版も出ていますが国会図書館のウェブサイトではデジタルデータでも見ら

れるようになっていきます。右側に「原文を見る」、「ダウンロード」というボタンなどが並んでいます。「原文を見る」というのを押していただくと、本の中身が見られるようになっていきます。これは第一三号です。朝鮮近代文学を研究されている方がおられたら、雑誌に掲載されていたもとの記事がどこにあるか確認するというようなこともできます。

このように国立中央図書館や国会図書館のホームページをそれぞれ見ていただくこともできますし、それらを一気に検索してしまおうという場合は「国家電子図書館」というポータルサイトが利用できます。今お話した国立中央図書館や国会図書館のほかに、学術研究情報サービス、法務院（裁判所）図書館、韓国科学技術院図書館、科学技術情報研究院、農村振興庁、国防電子図書館（国防部が運営）、これらの本も全部まとめて検索できるというデータベースもあります。こちらでは原文画像のあるものだけを選択して検索ということもできるようになっています。これがトップページ (<http://www.alibray.go.kr/>) です。

韓国ではデジタルになったデータをそれぞれの機関が提供しているほか、それらをまとめて検索できるというデータベースをまた別につくっていることがあり、データベースをたくさんつくっている国であるということが言えると思います。

それでは次に、朝鮮の歴史や現代史を研究されている方向けになるでしょうか、学術論文のデジタル化も進んでいるので、そちらをご紹介したいと思います。

こちらは教育部傘下の韓国教育学術情報院というところが運営している「学術研究情報サービス」(<http://www.riss.kr/index.do>)です。日本では「CINii Books」や「CINii Articles」というデータベースがありますが、その韓国版と考えていただいたら良いと思います。大学でどんな本を持っているかというのをまとめて調べられる目録や、学位論文、学術誌の雑誌記事も検索できるようになっています。

先ほどからIMF危機というのが出てきますが、その後の二〇〇〇年一月から国家学術研究データベースをつくり始め、デジタル化を行いました。こちらも著作権処理は済んでいるものについては、利用者登録をしなければいけないのですが、ログインしていただいたらPDFでファイルが見られます。これもどんな感じなのかを見ていただきたいと思います。

例えば「日本語教育」と入力して検索してみます。日本語で入力してもかなりヒットします。これは韓国において日本語で発表されている雑誌記事、論文などが多いということもあります。上が学位論文で、博士論文や修士論文が九九件ヒットしています。国内学術誌論文が三二四件

ヒットしていますけれども、ここには「学術研究情報サービス」のデータのほかに、有料で見られる雑誌記事も含まれています。韓国の主な電子ジャーナルのデータベースとしてKSSsとDBpiaがあり、図書館、機関であればそれらを購読していることもあるかと思いますが、それらのデータもヒットしています。

例えば『日本語研究』という雑誌に投稿された雑誌については、教保文庫が提供しているデータベースを契約している機関内であれば、直接ここから原文が見られるというシステムになっています。研究論文を調べる場合には、これまでご紹介した国立中央図書館と国会図書館と「学術研究情報サービス」を利用すればかなりのものが入手できると思います。

学位論文については、「原文を見る」というボタンを押すとIDとパスワードを入れる画面になり、入力すると学位論文がすぐ入手できるようになっています。

このように、学術論文や学会誌に関していうと、かなりデジタル化が進んでいる国であるということが言えると思います。

では、歴史の史料類のデータベースをご紹介したいと思います。一つ目は「韓国史データベース」(<http://uh.history.go.kr/>)です。教育部傘下の国史編纂委員会という、歴史関係の事業を行う組織が運営しているデータ

ベースです。韓国史の古代から現代までの史料が統合検索できるデータベースで、原文にもリンクしています。インターネット上で無料で使えます。

こちらもIMF危機以降の情報化政策の一環で大量にデジタル化を始めています。その後、知識情報資源管理事業というものが行われるのですが、各機関がデジタル化するときに重複がないように、国で一括して分野等を調整しながらデジタル化を進めていこうということになりました。

朝鮮・韓国史にご関心のある方だったらご存じの史料名だと思いますが、『三国史記』『三国遺事』『高麗史』『高麗史節要』『承政院日記』『朝鮮王朝実録』『備辺司謄録』など、基礎的な史料が入っています。そのほか、国史編纂委員会が史料集として出している『韓国史料叢書』なども本文テキストを全部入力して検索できるようにしています。ほかに、朝鮮総督府の職員名簿についても、人名から検索できるようになっていきます。

韓国史データベースには、たくさん史料が入っていますが、その中にちょうど写真集が入っていますので、それをご紹介します。これは釜山市立図書館にある戦前の日本語資料をデジタル化したものです。ソウルを撮った写真です。蔵書印に「釜山府立図書館蔵書」とあります。当時のソウルの様子がこのようにデジタル化されて

いて見ることができます。

ほかには『朝鮮王朝実録』という史料がテキストデータに入っていて見られるようになっていきます。以前「宮廷女官チャングムの誓い」というドラマがありました。そのチャングムの項を今表示させてみたところです。ハンゲルで장군(チャングム)と入れてみたら、このようなデータがヒットします。『朝鮮王朝実録』は漢文で書かれていますので、その漢文テキストが左下に出てきて、その画像のページの写真が右側で確認できます。左下の漢字が全部正しいかどうか、右の画像も見比べながら見ていただいたら確実かと思えます。

このデータベースだけでかなりのものが調べられますが、さらに多くのことが調べられるデータベースが「韓国歴史情報統合システム」(<http://www.koreanhistory.or.kr>)というものです。九州史学会・公益財団法人史学会編『過去を伝える、今を遺す』(山川出版社、二〇一五年)という本の中で、川西裕也さんが、この「歴史統合システム」の活用法と注意点をまとめられた論文がありますので、「歴史学とデジタル化」、見ていただければと思います。これは国史編纂委員会がつくった韓国史データベースのほかにも、ソウル大学の奎章閣や韓国学中央研究院など、歴史関係の資料を所蔵している機関が提供しているデータベースを、まとめて検索するというシステムになっています。こ

こちらも提供元のデータベースにリンクしていて、インターネット上で誰でも無料で使えるようになっていきます。

このデータベースからかなりのものが調べられるのですが、今回は朝鮮総督府で通訳をしていた前間恭作という人の名前で調べてみたいと思います。漢字では出ないようですね。日本漢字でもヒットすることがありますが、ハンゲルで入力し直すと恐らくヒットすると思います。今回はあらかじめ用意した画像をお見せします。このようにさまざまな資料がヒットします。ここではその中から『駐韓日本公使館記録』という国史編纂委員会が刊行した記録集を見ます。テキストの原文が左側に表示され、右側にその朝鮮語訳が表示されています。実際のファイルも見ることができるようになっています、そのうちのページを今お見せしていますけれども、明治三九年に韓国の南西部の木浦というところ出張に行つて帰ってきた、その復命書がこのようにデジタル化されて提供されており、インターネット上で確認できます。

韓国では、史料類はかなりのものが国を挙げてデジタル化して、その史料の本文までもがテキストデータとして入力されていて、データベースで提供されています。日本でデジタル化という場合、画像データであることが多く、その本のテキストまで検索することは難しいこともあります。韓国だと、特に史料集の場合、その史料集にどんな内

容が載っているかといったキーワード検索をするときにも、先ほどの「歴史情報統合システム」といったものが大いに活用できるかと思っています。

同じく教育部傘下に韓国古典翻訳院というところがありますが、ここでは「韓国古典総合データベース」(<http://db.ikc.or.kr/ikcdb/mainIndexFrame.jsp>)というものを提供しています。朝鮮の政治家や文人の著作をまとめた文集、歴史書、先ほどご紹介した『朝鮮王朝実録』や歴史の基礎的な史料と言われているものの原文と現代朝鮮語訳がこちらで提供されています。また『韓国文集叢刊』という文集をまとめた出版物がありますが、その全五〇〇巻の原文イメージと、その続巻一一五集までの原文テキストなどが収録されており、こちらもインターネット上で無料で使えるようになっています。

韓国のデータベースは大体今見たいだいたとおり見かけがハンゲルで表示されていて、言葉ができない場合はなかなか使えないかもしれませんが、この「古典総合データベース」は日本語のインターフェースも用意されています、ハードルが低いデータベースであるといえます。

例を挙げます。これは朝鮮出兵の後に明の使節が朝鮮の役人と一緒に日本に来たときの資料で『日本往還日記』というものですけれども、もとは右側のように漢文で書かれています。左側に現代朝鮮語訳が載っています。

史料類の最後に、「文化遺産デジタルハブ」(<http://hub.cha.go.kr/main.do>)を紹介しています。こちらは文化財のデータ、遺跡や仏像といったものが統合検索できるデータベースになっています。インターネット上で使えるようになっていまして、そのデータを二次利用することもできます。

では韓国の南西にある慶州という新羅的都だったところにある石窟庵のデータを見てみたいと思います。文化遺産の報告書のほか、写真、動画、図面、調査研究報告書などが出てきます。これは石窟庵を3Dで見られるという画像です。別のソフトが要るようなので、ここでは映しませんが、こうやって石窟庵の中が見られるようになっていまして、ほかには、石窟庵がどうやってできたかを紹介している動画などがヒットします。もちろん写真も見られます。これの詳細を見ると、こういうような条件で使えるというマークがついています。このマークはまた後で説明します。このデータベースで、かなりの遺跡・文化遺産のデータが入手できるようになっています。

韓国でデジタル化されているもので特徴的なものとして新聞記事があると思います。日本では、主要新聞のデータベースはありますが、有料のものが多く、図書館や大学などの契約しているところに行き、データベースを利用することになります。韓国の場合には新聞記事検索がインターネット上で無料でできる新聞があります。

例として「KINDS」(<http://www.bigkinds.or.kr/search/totalSearchMain.do>)とどう、韓国言論振興財団が運営しているデータベースを紹介します。これは無料で新聞記事の検索ができるほか、一九世紀後半、近代的な新聞が発行されたと言われているときですけれども、そこから現在の新聞までがこのデータベースで見られるようになっていきます。どんなデータベースか見てみたいと思います。

トップ画面です。トランプ氏がアメリカ大統領選挙で当選しましたので、その関連の記事が見えます。ここで、例えばTPPと入れてみます。これがキーワード検索したときの状態です。そのキーワードがこれまでどういうふうに使われてきたか時系列でたどっていくというような使い方もできるようになっていますので、現代の韓国について、調査する際や現地の状況をさかのぼって検索しようとするときに、このデータベースはかなり使えると思います。私たちもよく利用しています。

ここで、韓国で最初に発行されたと言われている新聞の画像を見てみたいと思います。『漢城旬報』という新聞ですが、これは復刻版が出ていますが、こちらはそれをPDF形式で公開しています。一八八三年一〇月一日号です。

日本の植民地期には朝鮮語の新聞が減っていき、終戦前は『毎日新報』という新聞一紙になるのですけれども、その新聞のデータも見られます。一九四五年八月一四日版の

紙面を映し出してみたいと思います。今二面を出していません。これは復刻版も出ていますが、印刷が不鮮明で、本ではかなり読みにくいのですが、こちらはPDFファイルですので、これをダウンロードしていただいて、このように拡大して見ていただいたら、かなり判読できる状態にまで持っていけるようになっていきます。植民地期の新聞についてもデータベース上で見ていただくことができるようになっていきます。

一九四五年以降の新聞も見られるようになっていきます。タイトルは限られますが、京郷新聞、東亜日報、ソウル新聞、韓国日報のほか、地方紙の釜山日報や慶南日報などが見られるようになっていきます。

この場合はキーワード検索はできませんが、日付を選ぶと、その紙面をPDFファイルで見られます。一九七九年一〇月二七日、今の朴槿恵大統領の父親である朴正熙大統領が部下に拳銃で撃たれて亡くなった記事です。このように当時の新聞も見られます。

新聞記事調べることについては、韓国ではこのデータベースに入力されている新聞であればかなり調べられます。朝鮮日報や中央日報などについてはこのデータベースには入っていないので、別に検索しないといけません。

もう一つ新聞のデータベースを紹介します。韓国の大手ポータルサイトであるネイバーという会社がありますが、

「ニュースライブラリー」(<http://newslibrary.naver.com/search/searchByDate.htm>)という、過去の新聞を創刊号からデジタル化して提供するというデータベースを運営しています。こちらでも京郷新聞、東亜日報、毎日経済、ハンギョレという四つの新聞が創刊号から見られます。今日は一月一二日ですが九四年や九九年の今日の新聞が表示されています。このデータベースは、先ほどのKNDISと違ってキーワード検索ができるようになっていきます。日本語では検索できず、ハングルを入力して検索します。

ここではあらかじめ検索してきた結果をお見せしたいと思います。今、韓国の大統領は友人の崔順実氏のことと騒ぎになっていきます。これは、その父親である崔太敏氏が亡くなったときの記事です。このデータベースの特徴としては、紙面のイメージが左側に映っていますが、右側にテキストのデータも入っているので、新聞の記事のテキストデータだけを取り出して見ることができるようになっています。見出しにも、「維新末期朴槿恵信任をもとに「実権」のうわさ」などと書いてありますけれども、このころから朴槿恵大統領と崔氏と関係があったようなことがこの記事にも書いてあります。ですので、こういった過去のことを調べていくとき、新聞記事は有効な手段の一つだと言えると思います。デジタル化された新聞記事によって、無料でどの国の人でも調べることができるようになってい

いうことになります。

ここまでデジタルアーカイブを構築した結果としてさまざまなが見られるということをご紹介してきました。

さて、デジタルアーカイブを構築したとき、新たな問題になっているのが二次利用の問題です。デジタルで公開されたデータを引用して使うとか、加工して使うとかということですが、せっかくデジタルで公開していても、その公開した人に許可を取らないといけないとか、誰に許可を求めればいいのかとか、そういうようなことが問題になってきます。

ここで韓国を例をご紹介したいと思います。政府刊行物や地方自治体の著作物については、公共ヌリと呼ばれる、公共著作物自由利用許諾表示制度というものが定められています。これは韓国の著作権法で、公共著作物は原則として許諾なく利用できると規定されているほか、二次利用についても条件整備がなされています。

これが公共著作物をまとめて検索できるといふサイト (<http://www.kogil.or.kr/index.do>) です。先ほど、文化財のデータベースをご紹介したときに、何かマークがついていたのを見ていたかと思いますが、四段階に分かれています。一番上の第一類型は出所さえ表示すれば商業的にも非商業的にも使ってもよく、二次の利用も可能というものです。上から二番目のマークについては、出所を表示した

上で非商業的にのみ使っているという第二類型。第三類型は出所表示したうえで、変更を加えず利用してくださいというもの。最後の第四類型は、出所を表示したうえで、非商業的にのみ使うことができ、変更が不可能、つまりそのままの状態でのみ利用できるといふもの。これら四つの類型が準備されています。このマークがついていたら、その条件に従って公共の著作物については使えるという制度が整えられています。

日本でも最近クリエイティブ・コモンズという考え方が導入されつつありますが、韓国では、公共著作物については、同様の考え方だといえると思います。

最後にまとめてみたいと思います。

韓国のデータアーカイブでは、韓国の本、朝鮮語資料が利用できるのはもちろんですが、一九四五年以前刊行の日本語資料もかなり利用できるということがわかります。韓国・朝鮮のことを研究されている方であれば、その学術論文や学位論文を入手したときに、ほとんどデジタル化されていますので、大いに利用することができます。歴史関係の史料類はかなりの機関が多くのデータベースを作成していて、これが無料で公開されており、テキストデータや原文データも利用できるといふ状況です。

韓国の一つの特徴として、新聞記事が過去のものから現在のものまで、インターネット上でかなりのものが利用で

きると言えます。

一方、機関ごとそれぞれ原文のデータを見るためにビューワーというソフトが必要となる場合があります。本日はあらかじめ画像を用意してきましたが、ソフトによってはその場ですぐに見られないとか、パソコンに設置できないというようなことも起こってくると思います。

特に歴史史料で言えることですが、かなりのデータベースがありますので、これを見たいとわかっておられるときはかえってどのデータベースを見たらいいのかというのを迷われることもあるかもしれません。

なお、今日はお話ししなかったのですが、本などの文字資料のデジタルアーカイブのほかにも、映画などもデジタル化が進んでいます。

最後に、ちょっと宣伝させていただければと思います。初めの方でも少し触れましたが、国立国会図書館のホームページ内に「アジア諸国の情報を調べる」というページがあります。この中には「調べ方案内」という、テーマごとに参照すべき資料や情報をコンパクトに案内するものや、「Asalinks」という、日本を除くアジア地域を網羅したリンク集、『アジア情報室通報』というアジアの図書館事情や出版事情を紹介している季刊誌のインターネット版の公開などを行っていますので、ご参考にしていただけたらと思います。

私が用意してきた話は以上です。ありがとうございました。

(了)